

〈 召天者記念礼拝説教 〉 2010年 11月 7日

召天者礼拝一死を滅ぼしてくださる方

イザヤ書 25章6～10節

テモテへの手紙 第二、 2章8～13節

武 田 真 治

一、この一年の召天者を覚えて

今まで、教会に保存されている召天者全員の写真を礼拝堂の前方に飾っておりましたが、とても手狭に成って参りましたことと、新しく一階も礼拝室として整備できましたことから、この一年の間に天に召された方々の写真を礼拝堂に据えて、これまでの方々の写真については一階の礼拝室に置かせて頂くことに長老会で決定しました。その代わり、礼拝後に一階で皆様としばらく「偲ぶ時」を持ちたいと願っています。

この長老会の決定に従い、私もこの召天者記念礼拝の説教でもこの一年、天に召された、谷忠久兄、清水 浩兄、須澤政子姉、清水イツミ姉の四名の召天者の方々を皆様とご一緒にもう一度覚えながら、み言葉に聴きたいと願っています。

谷さんは、3月9日入院先の病院にて天に召されました。96年のご生涯でした。

谷さんのご生涯に大きな影響を与えた出来事は長崎での被爆体験でした。

『シャローム第141号(1995年8月発行)』に於いて、その被爆の時を振り返っておられます。

即ち「その時、私は構内向島にあります建物二階会議室で会議中でありました。突然物凄い閃光を受け、これは空襲かと直感した私共は防空壕に避難しようと一階へ掛け下りました時、硝子壁が猛烈な爆風で粉微塵に砕け、私は顔面血だらけになりました。私は、浦上の爆心地近くの分工場に出かけておりました松崎技師の安否が気になり、負傷していないかと被災者の収容場所に行き、探し回りました。案の定、収容所の片隅に変わり果てた松崎技師の寝姿を見つけ走り寄りましたが、既に顔面は原爆で甚だしく痛み、衣服は飛散し、そして間もなく息を引き取って逝きました。それから私は家族の安否が心配になり辛うじて家に辿り着いた時、家族は私の変わり果てた姿に驚いたようでしたが、皆何とかかけがもなくほっとしました。」とあり

ます。

私がこの文章を読んで不思議に思いましたことは、なぜご家族よりも先に松崎技師のことを心配され捜しにいかれたのかという点でした。この点についてご遺族からお聞きした事情は、松崎技師はその日、会議に出席する谷さんの代わりに仕事場に行っておられた方であったそうです。ですから、谷さんは『本当は自分が爆死していたはずだ』と仰っておられたそうです。それ故、ご家族よりも先に松崎さんの安否を尋ねに行かれたのであり、また「すまなかった」という思いをずっと持っておられたのではないかということでした。

この文章の最後には『私は今、原爆から 50 年を経て、私のささやかな原爆体験を回想する時、ただ謝罪に満ちた痛みを覚えつつも、なお背いても背いても捕え、呼びかけ給う主なる神の声に耳を傾けて歩くことが出来たらと祈るばかりであります。』とあります。ここに谷さんの信仰の原点を学ぶように思います。この体験がおありであったが故に、私たちの罪のために代わって犠牲となって下さったイエス様の十字架の意味をも、その深い所で理解しておられたのであろうと教えられます。

清水浩さんは、4月14日の朝、くも膜下出血を起され緊急入院、5月5日天に召されました。94年間のご生涯でした。

清水浩さんのご生涯にも、谷さんと同じように、戦争が影を落としています。

それは、大学を昭和15年に卒業され、会社に就職され前途洋々でしたのに、17年に軍隊より招集を受けられ入隊。しかしその軍隊での苛烈な生活のために肋膜炎を患われ、陸軍病院に入院を余儀なくされたのでした。戦時下の栄養事情は悪く、病はなかなか完治せず、転院された西条の病院で終戦を迎えられました。浩さんにとっては、戦争が終わっても、戦争で背負わされた病いと戦いはなお続いたということです。ようやく病いが癒され県職員の職を得て、昭和31年岡野美代子様とご結婚されて落ち着きとやすらぎを感じる事がお出来になったのではないかと思います。

須澤政子さんは、3月28日の礼拝に出席された後の帰り道に、脳出血を起こされ緊急入院をされました。一時は、意識もはっきりされ、半身を少し動かせられるところまでご回復され、リハビリのための次の入院場所も決まりつつありましたが、急に喉の機能が弱られ、息をする

こと自体が体力を大幅に奪われることになり、7月18日の朝、天に召されました。79年と半年のこの地上でのご生涯でした。

私は今でもまだ政子さんがお亡くなりになられたことが信じられない思いがしております。「先生、元気？」というあの少ししゃがれた声が後ろから聞こえて来そうな気がする程です。しかし、私たちは政子さんのことを思うたびに、同時にそこで思い出さなければいけないことは、政子さんがいつも口ずさんでおられた『主の山に備えあり』という聖句です。創世記 22章 14節にある、あのアブラハムがイサクをまさに神様に献げようとした時に「待て」という声が天から下り、身代わりの雄の羊を神様はちゃんと用意して下さっていたことを感謝して語った言葉でした。これこそイエス様の身代わりの死、私たちの罪を清めるために代わりに死んでくださった十字架の死を表していると言われている聖書の言葉です。政子さんは、厳しい時、先が見えなくなってしまったと思えるような時にも、必ず神様からの導きと備えは用意されていると信じて、その生涯を歩まれたのでした。

最後に清水イツミさんのことを覚えます。2007年の春、体調を崩され入院。しかし、その病院の生活を「ちぎり絵」や「ぬり絵」、また多くのお弟子さんたちの訪問を受けられつつ楽しく過ごされました。徐々にお体が弱くなられて行き、8月31日の午後、静かに天に召されました。96年間のこの世でのご生涯でした。しかしその日の朝までしっかりと意識を持っておられご家族とお話もなされておられたことは素晴らしいことだと思います。

まさにイツミさんのご生涯は、まさに『後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。』というフィリピの信徒への手紙 3章 13節以下のみ言葉そのものでした。常に前向きに、生涯求め続けた方でした。私たちはイツミさんから料理やワイン他、たくさんの教えを受けましたが、そのいつも向上心を持って生きる姿勢にこそ、私たちが学ぶべき何よりのことではないかと思えます。

二、キリストは常に真実であられる

本日の聖書箇所は『テモテへの手紙二』です。伝道者としての歩みを始めたばかりの若いテモテに対して、彼の教師である先輩伝道者パウロがあれこれとアドバイスを与えている手紙が

この書です。特に、この2章8節以下はパウロが受け継いだ福音の本質について述べている箇所です。

彼はまず『イエス・キリストのことを思い起こしなさい』と勧めています。若い伝道者にとっては人の言葉や行動がどうしても気になることでしょう。だからこそイエス様のことをいつも思ってなさいよと。私たちもただ召天者のことを思い出すだけでは悲しみや無念さだけが募ることになります。しかし同時に、この召天者の生涯を導かれ、今も私たちの側にいてくださるイエス様のことを思い起しましょう！

そして『わたしの宣べ伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されたのです』と語っています。イエス様の復活が何より伝道者パウロの生涯を支えていたことがここから分ります。私たちもいつかイエス様と共に復活するのです。この信仰こそ、本日の召天者記念礼拝でもう一度確認すべき信仰内容です。

この復活を信じる信仰が与えられている素晴らしさを、パウロは自らが愛し、口ずさんでいた讃美歌を続けて引用することによって讃美し、褒めたたえています。

即ち「わたしたちはキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになる。耐え忍ぶなら、キリストと共に支配するようになる。キリストを否むなら、キリストもわたしたちを否まれる。わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる。キリストは御自分を否むことができないからである」と。

完全にキリストに誠実にその生涯を全うすることができる者は誰もいないのではないのでしょうか？それでも見放さないで、こうして導いて下さっている事実は、私たちの立派さや忠実さではなくて、キリストが私たちのことを離されないからだからです。この愚かで反抗ばかりしている私たちにもかかわらず。

最初に紹介した谷さんの『背いても背いても捕え、呼びかけ給う主なる神の声に耳を傾けて歩くことが出来たらと祈るばかりであります。』という言葉に、本日この時、私たちも心から同意し、声を合わせ讃美を献げたい！
(説教より抜粋)